福島の児童文学者　３４

◆片平　幸三　かたひら・こうぞう（１９２５～　）

平成 21 年 1 月撮影

児童文学作家。福島児童文学研究会会長、日本児童文学者協会福島支部代表。日本民話の会、日本演劇協会、福島学校劇研究会に所属。福島師範学校（現福島大学）卒。以後４０年教師を務める。

片平氏は、児童文学、児童演劇、民話など、幅広い分野で児童文化の向上を図るために、永きにわたり、地域に根ざした活動を続けてきた。ここでは、片平氏の活動を中心に、戦後の福島県の児童文学・文化活動の歴史もたどってみたい。

●本好きな少年から教師へ

片平氏は、1925（大正14）年、伊達郡保原町（現伊達市）で農業を営む家に４人兄弟の末っ子として生まれる。自ら語った思い出として「幼い頃、いつも寝る前に父親から本を読んでもらっていた。学校に入ると、友だちから借りた本が面白くて家までの道のり４キロを読みながら帰ってきたこともある本好きな少年だった。また、近くの沼で泳いだり自然の中で元気よく遊んでいた」という。1939（昭和14)年に福島師範学校に入学。最初に出会った担任は音楽の教官の佐藤広市氏。その妻が、のちに一緒に児童文学を研究するようになる児童文学者の佐藤久子氏である。同窓には教育評論家の遠藤豊吉氏（二本松市出身）や児童劇作家の大隅真一氏（南相馬市出身）らがいる。1944（昭和19)年に福島師範学校を卒業、保原国民学校（現保原小学校）の教師となる。翌年には召集令状が来て会津若松の東部２４部隊に入り軍隊生活を経験する。

●学校劇の活動

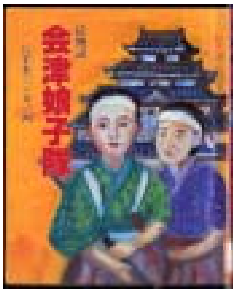
1945（昭和20)年に終戦となり復職。当時、学校では新教育のあり方を模索していた時期で、学校劇が注目を浴び、学芸会が盛んに行われていた。片平氏も「虹」という作品を福島県の学校劇脚本コンクールに応募し入賞、上演される。1951（昭和26)年には「秋空」(『福島県学校劇選集』福島県教員組合）を発表、その後「花火」、「こがねの沼」、「石が森物語」など数々の脚本を手がける。1952（昭和27)年には福島第二小学校に転任する。このころ、福島市の教師らによる「福島市学校劇研究会」が発足し、会員が自作の学校劇脚本を持ち寄り研究していたという。1954（昭和28)年には、以前から親交があり、東京で日本学校劇連盟の事務局長をしていた冨田博之氏（霊山町出身、一時福島第一小学校の教師をしている）から依頼を受け、学校劇全国大会を福島市で開催するために尽力する。大会は木下順二講演会や各分科会が催され盛会であったという。これを機に、県下では学校劇の研究が広まり出版なども盛んになる。片平氏も「割れた窓ガラス」(『児童劇作』児童劇作の会)、「十五少年漂流記」(『世界名作学校劇集』ポプラ社)、「つばきごうはしれ」(『子ども会劇場』さえら書房)、「足長手長」(『校内放送台本集』実業之日本社）などを次々に発表している。

●民話の研究、『福島の民話』の編集を担当

片平氏と民話の出会いは、学校で子どもたちに民話を語ったことがきっかけであったという。そして、「面白いからもっと聞かせてくれ」と言う子どもたちの声に応えたいという思いと、家庭訪問をする中で土地の古老が多くの昔語りを知っていることに気付き、それを後生に残したいと取材の旅をはじめた。忙しい教員生活の合間をみては、民話の収集のために、昔話を知る新しい語り手を探して県内各地を回ったという。それらの成果として、1958（昭和33)年には『福島の民話　第１集』(未来社）を発行する。これは、全国の民話を県別にまとめる「日本の民話シリーズ」の一冊で、その福島編を担当したものである。大変な労作で反響も大きく、その後、片平氏は、新聞に福島の民話を連載したり、福島の民話を子ども向けに放送する放送劇の台本を執筆したり、テレビに出演して民話の解説などを担当したり等々、多方面で活躍することとなる。

●同人誌をはじめとして情熱あふれる創作活動を展開

1949（昭和24)年には、福島県に「日本児童文学者協会福島支部」が誕生する。これは、坪田譲治ら中央の児童文学者と交流があった在野の児童文学者小林金太郎氏、金次郎氏兄弟や佐藤久子氏らが、同協会の理事である関英雄氏を招いて設立したものである。片平氏も設立当初から参加している。同支部は翌年の２月に児童文学同人誌『芽生え』を発刊。３号からは、童話ばかりではなく童謡や民話、学校劇等をふくめた児童文学をひろく育てていこうと『メルヘン』と改題し情熱あふれる創作活動が行われていた。この時の同人は、他に、新開ゆり子、青戸かいち、羽曽部忠、遠藤豊樹（遠藤豊吉のペンネーム）氏らがおり、金太郎氏の家で批評会を開き研究を重ね作品を作りあげていたという。（同人誌は１０号あたりで廃刊。その後、一部の会員らで『木馬』『あかべこ』『うりんぼ』などの同人誌が発行されたがいずれも数号で廃刊）1975（昭和50)年に、三橋正雄、金田和枝、一色悦子、最上二郎氏らが「福島児童文学研究会」（※）を結成、同時に「日本児童文学者協会福島支部」も再結成される。この時、片平氏は副会長、1992（平成4)年には会長に就任し現在に至っている。



設立年に同人誌『山彦』を創刊、以来発行を重ね2007（平成19)年には３４号発行、現在は最新号の編集中である。片平氏は、創刊号から毎回作品を発表している。また、『会津娘子隊物語』（歴史春秋社　1979)、『大鳥城の継信・忠信』（福島出版社　1984)、などの歴史物語を次々に発表している。『絵物語　会津娘子隊』（歴史春秋出版　1992）では、師範学校時代にはじめたという油絵の腕を活かして挿し絵も担当している。さらに、「学校のオオハクチョウ」（『生きる仲間』日本動物保護管理協会　1999）で、第１１回日本動物児童文学賞を受賞。

※「福島児童文学研究会」について

この会は、詩人佐藤浩氏（郡山市出身、「青い窓の会」主宰）と山崎義人氏（元郡山市図書館長）の呼びかけに応じて結成され、児童文学ならびに広く児童文化の分野にわたる研究を行っている県内唯一の児童文学公認団体。県文化振興基金より援助を受けている。目的に「会員による児童文学の創造とその普及を図ること。地域の子どもの文化の向上に貢献すること」を掲げ、同人誌『山彦』や、同会で編集委員会を組織し『福島県の民話』（偕成社　1978)、『福島県のふしぎな話』（歴史春秋出版　1988）『福島の童話』県別ふるさと童話館７（リブリオ出版　1998）などを発行している。現在、講演会や語り聞かせ・読み聞かせ会や手作り遊びの会などの新しい活動にも取り組んでいこうと広く入会を募っている。

〈　福島児童文学研究会・日本児童文学者協会福島支部発行の「同人誌」の変遷　〉

『芽生え』
（1950）

（大阪国際児童文学館　所蔵）

『メルヘン』
（『芽生え』解題 ）
（1950－1952頃）

（大阪国際児童文学館　所蔵）

『山彦』
（1975－）

●これからの活動

片平氏は、福島の地で児童文学・文化活動をつづけて６０余年。2006（平成18)年には、自らの歩みをふり返った『本との歳月』福島児童文学叢書第１集（福島児童文学研究会）を発行した。傘寿を超えた現在も意欲的に創作活動や民話の語りなどを行っている。

先日お会いした際「これからぜひやってみたいのが、もう一度昔話を研究して、今を生きる子どもたちのために昔話を書くこと」と語って下さった。ますますのご活躍を期待したい。

参考文献：　『児童文化人名事典』（日外アソシエーツ1996）
「ふくしま人物史」（『福島民報』1969．9．11）　ほか

〈児童資料チーム：大﨑眞希子〉